イクロムと日本の関係構築の過程に関する研究

－ イクロムの資料室に残る 1959 年から 1993 年までのイクロム所長と日本とでやり取りされた手紙における話題の変遷を辿って －

西川　英佑

文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室
世界文化遺産部門

A Study on the History of Relations between ICCROM and Japan
- Tracing the Transition of Topics of Exchanged Letters between ICCROM Director General and Japan from 1959 to 1993, which remain in the ICCROM archive –

Eisuke NISHIKAWA

World Cultural Heritage Unit, Office for International Cooperation on Cultural Heritages, Cultural Resources Utilization Division, Agency for Cultural Affairs, Japan

和文要旨:イクロムの資料室に残るイクロムと日本が 1959 年から 1993 年までの期間にやり取りした手紙の調査を行った結果、この期間の両者の関係構築の過程でどのような出来事や人が関わり、どのような話題が取り交わされてきたかを明らかにした。また、その話題が動産文化財から不動産文化財の保護へと広がっていったこと、イクロムの協力を得ながら日本が豊かな経験を持つ和紙の保存技術等の分野において貢献してきたことが分かった。

キーワード：イクロム　資料室　文化遺産　国際協力

Abstract: This paper refers to a survey of the documents exchanged between ICCROM and Japan from 1959 to 1993, which remains in the ICCROM archive, showed what kind of event had influenced and who had been involved in the process of building a relationship between the two during this period. The study revealed that the topics exchanged have spread from the conservation of movable cultural heritage to that of immovable cultural heritage, and Japan had contributed in its experienced fields such as Japanese paper conservation while getting cooperation of ICCROM.

Keywords: ICCROM, Archive, Cultural Heritage, International Cooperation

１．はじめに

イクロム（ICCROM）は、正式名称を文化財国際修復研究センター（International Center for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property）といい、1956 年の第 9 回ユネスコ総会決議に基づき、1959 年にイタリア・ローマに本部が設置された国際政府機関である。現在までに 137 カ国が加盟している。活動内容は不動産・動産の文化遺産の保

護に関する研修・研究・記録・技術支援・普及啓発で、その中でも研修は特に主軸となる活動である。1972 年以降は世界遺産委員会の助言機関としても位置付けられる。

日本は 1967 年にイクロムに加盟している。イクロムには専門家から成る理事会が存在するが、1969 年以降、継続的に日本から理事が選出されている。現在は 2019 年のイクロム総会で選出された東京文化財研究所の西和彦がイクロム理事（計 25 名、任期 4 年）となっており、また 2020 年に設けられた監査委員会にも桜美林大学教授の荒田明夫が委員となっており、事業内容の決定に深く関与している。一方で、イクロムの予算はその多くを加盟国の分担金で賄っているが、日本はそのうち約 1 割を分担しており、アメリカに次いで第 2 位の貢献となっている。さらに 2000 年以降、文化庁から継続的に 1 名の専門職員を出向させ、比較的小規模な本部（現在、職員 37 名）を人材面でも支援している。

筆者は 2016 年 9 月から 2018 年 8 月まで文化庁からイクロムに出向した。この期間中には日本のイクロム加盟 50 周年を迎えている。この 50 年の間に様々な日本人専門家がイクロムと文化財修復に関する情報交換や協同活動を行っている。この機会に日本とイクロムの関係史の一端を明らかにするのは、今後の日本とイクロムの関係を考える上で、ひいては今後の日本の文化財修復に関する国際協力を考える上でも、有意義と考え、調査を行った。

本稿ではこの調査結果に基づき、イクロムの活動内容である研修や研究に関して、イクロムと日本が取り交わしてきた話題などの変遷について明らかにし、どのように両者の関係が構築されてきたかを考察した。なお、管見の限りではあるが、先行研究としては、文化財保護に関する日本と国際機関の関係を扱った河野靖の研究 [1)]があるが、イクロムについては概要の記述にとどまる。また、イクロムの歴史を記述したユッカ・ヨキレットの研究 [2)]があるが日本との関係に焦点を当てたものではない。

２．研究方法

イクロムの資料室には日本とイクロムの間で取り交わされた書類が保管されている。この書類は、主に所長が取り交わしたものと、プロジェクト毎の担当者レベルのものに分かれており、大まかにいえば、前者は全体的な動向、後者は各プロジェクトの詳細を知るのに適した書類である。今回調査対象としては前者（Series: Correspondence with Member States, Sub-fonds: Office of the Director-General, ICCROM）である。この書類は年代毎に分かれた箱に収納されており、今回調査したのはそのうち最も年代の古い箱で（File: Japan (1959-1993)）、その中には写真 1 に示すように 4 つのファイルが入っており、それぞれ 1959 年から 1975 年までの書類、1976 年から 1980 年の書類、1981 年から 1993 年の書類、1972 年から 1993 年の文化庁とやり取りした書類となっている。書類には手紙のほか、ファックス、電報、メモ、配布資料など多岐に渡り、また英語で書かれたもののほか、フランス語、イタリア語で書かれたものも含まれる。書類は年代順で重ねられているが目録等は存在せず未整理の状態である。書類の数え方によるので概数となるが、一箱目には約 760 ページの書類が保存されていた。

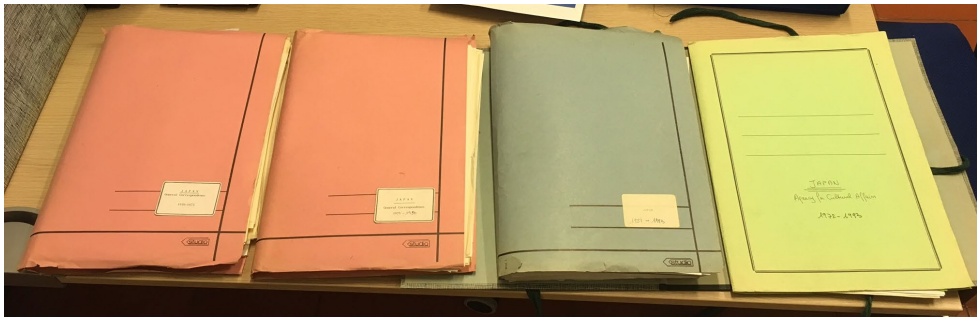

写真 1　調査対象とした 4 つのファイル
左から 1959~1975 年の書類、1976~1980 年の書類、
1981~1993 年の書類、1972~1993 年の文化庁とやり取りした書類

現段階でイクロムの規則に基づき情報公開されているのは調査時の 20 年前、すなわち 1997 年までの資料となっていたこともあり、上記の 1993 年までの書類が含まれる一箱目を調査対象とした。簡易的な写真撮影を行いデジタル化し、調査を行った。

調査では日本のイクロム加盟までの期間とイクロムの各所長の在任機関からなる 5 つの期間に分けて、各期間の書類から読み取れる取り交わされる話題や出来事、そこに関与した人々の専門分野などに着目しながら、1993 年までのイクロムと日本の関係史を辿っていった。この際に、イクロム所長が書簡を多く取り交わす日本人イクロム理事や、取り交わす話題に関係することが多い、イクロムの主たる活動である研修に参加した日本人専門家を把握することは重要であると考え、主たる出来事とともに年表とした。なお、日本人専門家の研修参加に関する情報については、イクロムの資料室に所蔵される日本に関する記録（File: Japan (2016-2018), Series: List of Activities, Relations with Member States, Sub-fonds: Office of the Director-General, ICCROM）で確認した。

表 1　日本とイクロムの関係構築に関する年表（1959~1993 年）

年	所長	理事	出来事	イクロム研修
1959	ハロルド・プレンダーリース		最初の手紙	
1967			日本がイクロムに加盟 日本で東洋絵画の修復に関する会議開催	
1968				1968年建築コース、イワクラ ショウコ
1969		岩崎友吉	プレンダーリースが訪日	1969年建築コース、タケイ マサタケ
1970				
1971	ポール・フィリッポ			
1972			日本で高松塚古墳発見	1972年壁画コース、羽田裕（東京藝術大学） 1972年建築コース、古林茂
1973			イクロムが高松塚古墳にモーラ夫妻らを派遣	
1974		倉田文作		1974年壁画コース、中沢一郎（東京藝術大学） 1974年建築コース、坂本勝比古氏（神戸市）
1975				
1976				1976年保存科学コース、内田俊秀（元興寺研究所） 1976年建築コース、陣内秀信（東京大学） 1976年壁画コース、増田勝彦（東文研）
1977	バーナード・フィールデン			1977年建築コース、亀井伸雄（建造物課）
1978			建造物課が修理工事報告書等80冊をイクロムに寄贈 フィールデンが訪日	1978年建築コース、天田起雄（建造物課） 1978年石造コース、西浦忠輝（東文研）
1979				1979年建築コース、上野邦一（奈文研）
1980				1980年建築コース、藤原泉（建造物課）
1981	ジェヴァット・エルダー		東文研がイクロムに増田勝彦を派遣	1981年保存科学コース、中村康（美学課） 1981年壁画コース、髙橋久雄
1982			東文研がユネスコ・イコモス・イクロムと 木造をテーマとした国際シンポジウムを開催	19 82年建築コース、中村雅治（建造物課）
1983		伊藤延男		1983年保存科学コース、望月幹夫（東京国立博物館）
1984			東文研がイクロムに増田勝彦を派遣 ユッカ・ヨキレットが訪日	1984年建築コース、益田兼房（建造物課）
1985			エルダーが訪日 イタリアでの和紙の保存の研修を開始	1985年建築コース、村上裕道 （文化財建造物保存技術協会） 1985年保存科学コース、梶谷亮治（奈良国立博物館） 1985年壁画コース、コバヤシ ヨシキ
1986			岩崎がイクロムアワードを受賞	1986年建築コース、松本修自（奈文研）
1987				1987年保存科学コース、青木繁夫（東文研）
1988	アンジェイ・トマシェフスキ		エルダーが訪日	1988年建築コース、斎藤英俊（建造物課）
1989				1989年保存科学コース、原田昌幸（美学課）
1990		馬渕久夫	トマシェフスキが訪日	1990年建築コース、清水真一（建造物課）
1991				1991年石造コース、井上洋一（東京国立博物館）
1992	マーク・ラーネン（-2000）		ラーネンが訪日 日本での和紙の保存の研修を開始	1992年建築コース、村田健一（建造物課）
1993				1993年写真コース・保存科学コース、川野邊渉（東文研）

※以下の略称を使用した、東京国立文化財研究所：東文研、奈良国立文化財研究所：奈文研、文化庁建造物課：建造物課、文化庁美術学芸課：美学課
※研修参加者は分かるもののみ所属機関を括弧付で示した

３．結果

(1) イクロム加盟まで（1959 年～1967 年）

イクロムと日本のやりとりは日本のイクロム加盟から遡ること約 8 年前、1959 年に副所長のポール・フィリッポより名古屋大学教授の山崎一雄に宛てた手紙から始まった。山崎は無機化学の研究者で法隆寺の壁画保存調査会（1915 年設立）にも関わった日本の初期の保存科学研究者である。手紙の内容はドイツの研究者からの依頼で日本の研究者の連絡先を教えて欲しいというものであった。この後、山崎はイクロムに訪問し、所長のハロルド・プレンダーリースとも面会し、その後も手紙を交わすなど、親交を深めた。

1960 年にプレンダーリースは東京国立文化財研究所の登石健三とも手紙を交しており、プレンダーリースからは登石の論文をイクロムの出版物に掲載することの相談、登石から

は国際会議出席や研究スポンサー獲得のための相談がされた。

上記のような研究者としてのやりとりの一方で、1959 年にプレンダーリースは文化財保護委員会委員長の河合弥八に手紙を送っており、元東京国立文化財研究所所長（1952 年～1953 年）の矢代幸雄と面会した際に日本との交流の必要性を感じたとし、日本政府にイクロム参加を求めた。しかし、この後のやりとりはなく進展はなかったものと思われる。1960 年、日本が加盟していないことを嘆くプレンダーリースに対し、登石が東京国立文化財研究所所長の関野克と相談した上で、当事、文化財保護委員会委員となっていた矢代に手紙を書くよう助言した。

1961 年にプレンダーリースは出張の途中、日本を訪問し東京国立博物館を視察できないか館長の浅野長武に問い合わせた。また、1964 年にはローマの日本文化会館を通じて文化財保護法の英訳を依頼するなど、日本への関心が伺える。

1965 年、文化財保護委員会がイクロム加盟に向けて動き出した。文化財保護委員会は同年 8 月 30 日のイクロムに宛てた手紙で、大蔵省に分担金の予算確保に向けイクロムに資料提供を依頼した。この手紙で文化財保護委員会は、ユネスコ代表のイクロム理事であったヒロシ・ダイフク（日系アメリカ人）から聞いていたアメリカのイクロム加盟に向けた動向が大蔵省に対する予算説明の助けになるとし、これに関する詳しい情報をイクロムに求めた。

1966 年夏にはダイフクが日本を訪れ関係者と打ち合わせを行い、外務省ならびに日本ユネスコ国内委員会ともにイクロム加盟に賛成であることを確認した。また東京国立文化財研究所の岩崎友吉も国際博物館会議（略称：アイコム（ICOM））で知り合ったフィリッポに宛てた手紙で、文化財保護委員会にイクロムに関する資料を提供するなどしてこの動向に協力していることを伝えた。

1967 年、イクロム理事長が日本ユネスコ国内委員会事務局長に日本政府からイクロム加盟の連絡を受けたことを伝えた。なお、1968 年開催の第 4 回総会にオブザーバーとして出席するよう招待状が日本政府に送られたが、連絡が遅かったため実現せず、1969 年の第 5 回総会から出席することとなった。

(2) ハロルド・プレンダーリース所長時代（1967 年～1971 年（在任期間は 1959 年～1971 年））

加盟後、引き続きプレンダーリース所長ならびにフィリッポ副所長の体制のもと、日本との交流が続いた。特にフィリッポと 1969 年よりイクロム理事となった岩崎は、フランス語で書かれた手紙で研究やイクロムに関する内容を頻繁にやりとりしており、家族ぐるみの付き合いもあったようで、親交を深めた。

ユネスコとアイコムの共催でフィリッポと岩崎が企画して、1967 年に東京と京都で開催された欧米博物館関係者対象の紙や絹に描かれた東洋絵画の修復に関する会議（専門家研修）は、イクロムと日本の関係者と知り合う良い機会となったようで、1968 年、国宝修理装潢師連盟理事長の宇佐美直八がイクロムを訪問、上記の研修で知り合ったフィリッポを訪ねた。この際に宇佐美はフィリッポより依頼のあったブラシや糊などの修理道具を持参し、フィリッポはこれを研修用のコレクションとしたようである。二人の交わす手紙にはイクロム関係者や日本の専門家の名前が多くでてきており、イタリア中央文化財研究所の修復技術者であるパオロ・モーラ、ラウラ・モーラ夫妻などもこれに含まれる。またこのやりとりの中で宇佐美はフィレンツェの洪水被害の復旧のために水に強い和紙を選んでフィレンツェ国立中央図書館に送付したことも伝えた。一方で岩崎とフィリッポを中心に上記の会議の成果として日本の表装に関する報告書の準備も進められていった。

そのほかの交流としては、日本イコモス理事長であった日本大学の小林文次がイクロムを訪問しており、小林から紹介のあった東京大学の稲垣栄三も 1968 年にイクロムを訪れた。また、1970 年に大阪で開催された日本万国博覧会に際し、美術品運搬時の環境管理に関する資料提供などでイクロムが協力しており、このような流れの中で、万国博美術館主事であった森田恒之がフィリッポに、イタリアを訪問する神戸市職員の坂本勝比古に対する歴史的建造物の保護の情報収集についての助言を依頼した。

研修に関しては、日本のイクロム加盟後、1968 年建築コース（正式名称：Architectural Conservation Course）にイワクラ ショウコが参加し、日本人で初めてのイクロムの研修参加者となった。また翌年 1969 年建築コースにタケイ マサタケが参加した。この時期の日本人参加者については詳細が分かっていないが、後にほとんどの研修参加者が公的機関からの公費での参加となるのに対し、当時は私費での参加であったと考えられる。イクロムからも、日本の文化財保護、特に町並み保存などに関心を持っており、日本人の研修参加、特に建築コースへの参加を期待していることが岩崎や小林に伝えられた。

1970 年、プレンダーリースが日本ユネスコ国内委員会の招待で訪日、東京や奈良での会議出席に加え、上記の日本万国博覧会も視察、岩崎と登石にも面会した。帰国後の岩崎に宛てた手紙で、帰りに立ち寄った台湾で文化財保護の諸問題に対し岩崎を招聘することを推薦したと伝えた。

(3) ポール・フィリッポ所長時代（在任期間 1971 年～1977 年、以下同様）

1971 年、プレンダーリースの引退に伴いフィリッポがイクロム所長となった。また岩崎が引き続きイクロム理事を務め、1974 年には岩崎に代わり奈良国立博物館館長の倉田文作が理事に選出された。

この時期の大きな出来事としては、1972 年の高松塚古墳発見であろう。1973 年、東京国立文化財研究所所長の関野からフィリッポに、高松塚古墳の壁画保存修復のための調査を岩崎がイタリアとフランスで行うに当たって、調査のための手配が依頼された。また岩崎からはフィリッポに、同問題に対しヨーロッパの専門家 3 名を日本に招聘することを相談しており、イタリア国立中央修復研究所のモーラ夫妻と助手のジョバンナ・サンマルティーノが派遣されることとなり、助手の旅費についてはイクロムが負担した。日本でモーラ夫妻らは壁画保存に関する調査試験や修理方法に関する技術指導を行った [3)]。またこの関係で東京藝術大学の中沢一郎の壁画研修参加や、同大学の鈴木民保のイタリア中央文化財研究所への派遣が行われた。その後、イクロムには高松塚古墳に関する書物や写真などが提供された。

また、東京国立文化財研究所の江本義理や新井英夫、奈良国立文化財研究所の澤田正昭や牛川喜幸のヨーロッパでの調査旅行におけるイクロムを含めた関係機関訪問のための手配などがイクロムに依頼されている一方で、フィリッポから倉田にスイス人のジャントンが日本で表装について学ぶための関係機関の紹介が依頼されており、専門家の交流がみられる。

この時期の研修には、1972 年壁画コース（正式名称：Mural Paintings Conservation Course）に東京藝術大学の羽田裕、1972 年建築コースに古林茂、1974 年壁画コースに上記の中沢が参加、1974 年建築コースに神戸市の坂本、1976 年保存科学コース（正式名称：Course on Fundamental Principles of Conservation、後に Course on Conservation Science、Scientific Principles of Conservation Course に改名）に元興寺研究所の内田俊秀、1976 年建築コースに東京大学の陣内秀信が参加した。また、1976 年壁画コースに参加した東京国立文化財研究所の増田勝彦は、翌年、ユネスコによって刀剣の修復専門家二名とともにイタリアに派遣され、ベネチアの東洋美術館やローマの中央修復研究所で、屏風や刀剣の損傷調査や修理実演を行い高い評価を受けた [4)]。

そのほか、1975 年、フィリッポが岩崎に宛てた手紙で盗難に遭いカメラを盗まれてしまい、日本のカメラが仕事に欠かせないためいち早く再び購入できるよう岩崎に協力を求めた。また、倉田の仲介があったようであるが、日本写真家協会ならびにニコンからカメラ 2 台がイクロムに寄贈された。日本のカメラが国際的に文化財保護の専門家の必需品となっていたことが分かる。

(4) バーナード・フィールデン所長時代（1977 年～1981 年）

1977 年、バーナード・フィールデンが建築分野を専門とする初めてのイクロム所長となった。日本側は引き続き倉田がイクロム理事を務めた。この時期、フィールデンは倉田と理事会関係の内容を中心に連絡を取る一方で、イコモスでの付き合いもあった伊藤延男と

もお互いに専門とする建築分野の内容も含めた連絡を取っていた。伊藤は 1978 年から東京国立文化財研究所所長を務めている。

1978 年 9 月にフィールデンは京都で開催された世界クラフト会議に出席するため日本を訪問、事前に木造建築や修理現場、庭園等も見学したいことを伝えており、東京では東京国立文化財研究所の伊藤が対応し、同研究所や東京国立博物館、文化庁のほか日光などを、関西では奈良国立博物館の倉田が対応し、同博物館、京都国立博物館及び国宝修理所、東大寺大仏殿の修理現場などを視察した。

同年のフィールデン訪日前に文化庁建造物課長の鈴木嘉吉が修理工事報告書等 80 冊をイクロムに寄贈していたこともあり、フィールデンは日本の文化財建造物修理に対し高い関心を持っていた。フィールデンは伊藤に日本の文化財建造物の保存事業に関する論文投稿などを依頼したり、国際会議で知り合った京都大学の建築構造学の教授である金多潔に木造建築の耐震性に関する資料などを依頼しており、日本企業から建築の測定機器や地盤改良工法といった技術情報を収集した。また、執筆中の文化財保護や地震対策に関する草稿を、伊藤や倉田を通じて、西欧とは違う保存概念を持ち、地震被害の経験を多く持つ日本の専門家に確認して欲しいと依頼した。

1979 年、フィールデンは日本ユネスコ国内委員会に対し、倉田とダイフクで行われた話し合いを踏まえ、二点の提案を行った。一点目は木造をテーマとした国際シンポジウムを日本で開催すること、二点目は東洋美術修復の専門家をイクロムに派遣することである。一点目に関しては、東京国立文化財研究所が 1977 年より毎年開催している国際シンポジウムがあり、イクロムは参加者の人選などで協力しており、第 1 回シンポジウムのテーマが木造ではあったが、改めて 1982 年に第 6 回シンポジウムを木造をテーマとし規模も拡大して開催することとなった。二点目に関しては、ユネスコのダイフクの調整により、1981 年に東京国立文化財研究所の増田がユネスコアソシエートエキスパートとしてイクロムに派遣されることとなった。

そのほか、東京国立文化財研究所の三浦定俊から欧米での研修に際しイクロムの研究施設の使用許可などの依頼が、同研究所の田辺三郎助から西欧訪問に当たり関係機関の紹介の依頼が、千葉大学の大河直躬から西欧での調査旅行においてイクロム訪問の依頼がイクロムにされた。研修に関しては、1977 年建築コースに文化庁建造物課の亀井伸雄、1978 年建築コースに文化庁建造物課の天田起雄、1978 年石造コース（正式名称 : Stone Conservation Course）に東京国立文化財研究所の西浦忠輝、1979 年建築コースに奈良国立文化財研究所の上野邦一、1980 年建築コースに文化庁建造物課の藤村泉が参加しており、文化庁建造物課からの建築コースへの参加が大部分を占めた。また 1976 年の研修に参加した陣内からは研究成果の進捗報告などが定期的に伝えられ、関係が継続していた。

(5) ジェヴァット・エルダー所長時代（1981 年～1988 年）

1981 年にジェヴァット・エルダーが所長となった。日本側は 1983 年より東京国立文化財研究所の伊藤が倉田に代わってイクロム理事に選出され、1988 年からは財務・計画委員会の委員長も務めた。

前述の通り、1981 年に東京国立文化財研究所の増田がイクロムに派遣され、ベネチアで 2 回、翌年ローマで 1 回の和紙に関する研修を開催した。イクロム理事長が文化庁長官に宛てた手紙でもこの研修が高く評価され、その継続を望んだ。1984 年に再度増田が派遣されることとなり、ローマでの研修開催に加え、ワシントンのスミソニアン博物館でも同研修が開催された。イクロムは 1985 年より和紙の保存の研修（正式名称 : International course on Conservation of Japanese paper）を継続的に行うことを決め、その講師を増田が継続的に務めることとなった。増田はこの間、研修コーディネーターのイクロムのシュバルツバウムなどと研修準備のための連絡を取っていた。

一方、1982 年には東京国立文化財研究所が木造をテーマとした第 6 回国際シンポジウムを開催した。開催前にはイクロム側の元所長フィールデンやトラッカと日本側の伊藤や倉田が参加者の人選やイクロムからの出席者等に関し連絡を取り合っていた。イクロムはこの後も引き続き東京国立文化財研究所が毎年開催するシンポジウムに出席者を送っており、

1985 年開催の第 9 回シンポジウムにはエルダーがシュバルツバウムとともに出席した。またエルダーは 1988 年にも日本を訪問しており、その際に文化庁の益田兼房や奈良国立文化財研究所の上野、東京国立文化財研究所の増田らイクロム研修経験者が対応してくれたことの喜びを帰国後の手紙で伝えた。

また、イクロムのユッカ・ヨキレットは、伊藤に日本の継手の模型発注を頼むなど、日本の木造建築や文化財保護に関心を寄せていたが、1984 年に日本学術振興会の招待で訪日、東京国立文化財研究所の伊藤や奈良国立文化財研究所の上野の案内で日本の文化財修理の現場などを視察し、滞在中に東京国立文化財研究所の第 8 回シンポジウムにも出席しており、ヨキレットは帰国後に感謝の手紙を日本学術振興会に出した。

そのほか、1982 年、エルダーから文化庁長官に文化財建造物の修理工事報告書の継続的な送付を依頼した。おそらくこれ以降、継続的に文化庁建造物課から毎年、修理工事報告書が送付されるようになったと考えられる。

この期間、名古屋工業大学の内藤昌の調査旅行の受け入れ機関となることなどの依頼がイクロムにされ、国立歴史民俗博物館の神庭信幸はイクロムで助成を受け研究を行った。研修に関しては、1981 年保存科学コースに文化庁美術学芸課の中村康、1981 年壁画コースに髙橋久雄、1982 年建築コースに文化庁建造物課の中村雅治、1983 年保存科学コースに東京国立博物館の望月幹夫、1984 年建築コースに文化庁建造物課の益田兼房、1985 年建築コースに文化財建造物保存技術協会の村上裕道、1985 年保存科学コースに奈良国立博物館の梶谷亮治、1985 年壁画コースにコバヤシ ヨシキ、1986 年建築コースに奈良国立文化財研究所の松本修自、1987 年保存科学コースに東京国立文化財研究所の青木繁夫、1988 年建築コースに文化庁建造物課の斎藤英俊が参加した。

(6) アンジェイ・トマシェフスキ所長時代（1988 年～1992 年）
　マーク・ラーネン所長時代（1992 年～1993 年（在任期間は 1992 年～2000 年））

1988 年にアンジェイ・トマシェフスキが、1992 年にはマーク・ラーネンがイクロム所長となった。この間、日本側は 1990 年より東京国立文化財研究所の馬渕久夫が伊藤に代わりイクロム理事に選出された。

1990 年には文化庁がトマシェフスキを秘書官のマリエットとともに日本に招待し、トマシェフスキは第 1 回アジア地域の文化財保護に関する国際セミナーに出席、東京、京都及び奈良を視察した。

1992 年より日本で和紙の保存の研修（正式名称：International course on Conservation of Japanese paper、国際研修「紙の保存と修復」）が開始、東京国立文化財研究所の増田がイクロムのガブリエラ・クリストとともに研修立ち上げの準備を行った。オーストリアで和紙に印刷した研修案内を作成した。

また、1992 年に東京国立文化財研究所が開催した第 3 回アジア地域の文化財保護に関する国際セミナーにラーネンとクリストが出席した。この訪問中、ラーネンは日本の関係者と今後の協力について話し合っており、地元の専門家と協力の上でアジア地域の研修等の事業を行う計画や、日本人スタッフを政府もしくは研究機関からイクロムに派遣する可能性についても議論した。1993 年には日本人スタッフの派遣について文化庁長官宛てに依頼文を送付した。

この期間、研修に関しては、1989 年保存科学コースに文化庁美術学芸課の原田昌幸、1990 年建築コースに文化庁建造物課の清水真一、1991 年石造コースに東京国立博物館の井上洋一、1992 年建築コースに文化庁建造物課の村田健一、1993 年保存科学コース及び写真コース（正式名称：Workshop on Conservation of Photographs）に東京国立文化財研究所の川野邊渉が参加した。

４．考察

以上のように明らかとなったイクロムと日本の関係構築の歴史から読み取れる内容について簡単に考察する。

まず、書類の内容については、初期において東洋美術品のような動産文化財の保存科学

やその技術が話題の中心であったが、高松塚壁画の発見を機会に壁画が加わり、やがて日本の木造文化財建造物のような不動産文化財の保護に話題が広がっていったことが分かる。これはもちろん、対象としている書類が主にイクロム所長のものであるため所長の専門分野によるところも大きいが、所長の専門分野はイクロムの組織としての方向性、ひいては文化遺産の国際的な動向を反映していたと考えられるので、イクロムと日本の関係の大きな流れを捉える上で重要な傾向といえよう。

また、壁画保存のための調査など国際的な情報収集を行う上で日本がイクロムを頼りにしてきた一方で、和紙を含む東洋美術品や木造の文化財の保存技術であったり、文化財建造物の地震対策といった日本の経験豊かな分野における貢献に対しイクロムから高い期待が寄せられ、日本はイクロムから助言や協力を得ながら、研修協力や情報提供を行ってきたことが分かった。今後も、日本がイクロムとの対話を継続し、国際的動向を捉えながら、上記の内容以外も含めた期待される分野において、積極的に協力していくことが国際的な貢献となる可能性を示唆している。

５．結論

イクロムの資料室に残る 1959 年から 1993 年までの期間にイクロムと日本の間でやり取りされた書類を対象に調査した結果、この期間にどのような出来事や人が関わることで、どのような話題が取り交わされてきたかを明らかにし、イクロムと日本の関係がいかに構築してきたかの過程の一端を示した。

調査対象とした期間の後にも、日本の世界遺産条約加盟（1992 年）、真実性に関する奈良会議開催（1994 年）、ACCU 奈良の国際研修開始（2000 年~）、文化庁からイクロムへ職員派遣開始（2000 年~）など、イクロムと日本の関係を考える上で重要な出来事が続いており、今回調査対象とならなかった書類に対しても今後の継続的な調査が期待される。また本研究はイクロム所長と日本の取り交わした書類を対象とした調査を行ったが、日本とイクロムの関係史の実像をより明らかにするためには、関係者へのインタビュー調査やイクロムの資料室に残る他の資料の調査などが望まれる。

６．謝辞

本調査のためにイクロムの資料室のマリア・マタ・カラバカ氏には多大なご協力を頂いた。深く感謝いたします。

また、紙の研修などの活動が評価されイクロムアワードを 2007 年に受賞した増田勝彦氏、2011 年~2019 年までイクロム理事を務めた川野邊渉氏、現在イクロム所長特別アドバイザーを務める稲葉信子氏には本稿をまとめるに当たり貴重なご助言を頂いた。心よりお礼を申し上げます。

（参考文献）

1. 河野靖『文化遺産の保存と国際協力』、風響社、1995
2. Jukka Jokilehto, “ICCROM AND THE CONSERVATION OF CULTURAL HISTORY A HISTORY OF THE ORGANIZATION’S FIRST 50 YEARS, 1959-2009” ICCROM, 2011
3. 濱田隆「高松塚古墳壁画の修復について」、『月刊文化財』、229 号、pp.12-18、1982 モーラ夫妻の来日時の調査や技術指導に関して詳しく紹介している。
4. 増田勝彦「文化財保存修復国際センターに留学して　壁画保存コース」、『月刊文化財』、173 号、pp.8-15、1978　壁画保存コースの内容とともにユネスコによるイタリア派遣の活動内容を詳しく紹介している。

（著者連絡先）

氏名：西川　英佑
住所：〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 3-1 小金井住宅 5-422
Email：e-nishi@mext.go.jp

（2021 年 2 月 1 日　作成）